

ミュージアム・アイズ

MUSEUM EYES

Vol. 50
2008

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

特集

明治大学博物館友の会 20年のあゆみ

50号までの軌跡
ミュージアム・アイズ



友の会が設立された当日の考古学ゼミナールの様子（1988年6月25日）

| | |
|------------------------|----------------------|
| 展示&リサーチ | 「高札」 |
| 収蔵室から | 「関孝和と検地帳」 |
| 市民レクチャー | 「黒耀石と考古学（2）」 |
| 学芸研究室から | 「Made in Japan の行く末」 |
| 博物館ニュース | |
| 入館者数の動き・団体見学の記録・M2カタログ | |
| 博物館友の会から・アンケートから | |

明治大学博物館

2008年6月25日、明治大学博物館友の会は、前身の考古学博物館友の会設立から20周年を迎えます。考古学博物館公開講座受講生の有志が立ち上げた会は、会員400名余りを数えるまでに成長し、また図書室・展示解説といったボランティア活動、遺跡見学ツアー、2004年の新博物館スタートにあわせて分科会化された平成内藤家文書研究会や工芸の会など多彩かつ多岐にわたる活動を、博物館と協力しつつ会独自に自立的な運営を行ってきました。今では多くの博物館で見られる活動ですが、一般化したのはごく最近のことであり、常に新しい試みに取り組んできた明治大学博物館友の会は、日本の博物館友の会活動のパイオニアであったといえるのです。

今回は友の会20年の足跡を振り返るとともに、記念行事についてご紹介します。

明治大学博物館友の会20年略史

<第1期> 考古学博物館友の会発足と基礎的な活動体制の構築

- 1987 ・「考古学ゼミナール」始まる。第1回は安藤政雄講師ほか「日本人類文化の起源を探る」
- 1988 ・6月25日、受講生有志が集まり「明治大学考古学博物館友の会」が発足、会員数150名。
・友の会会報創刊号を刊行。初代会長平吉平氏、顧問大塚初重氏（明治大学文学部教授）、倉田公裕氏（明治大学文学部教授）
・「大宰府史跡発掘調査20周年記念特別展」で会場案内・監視等のボランティア業務に従事
・遺跡見学会スタート。第1回は虎塚古墳ほか茨城県の遺跡。参加者42名
- 1989 ・その年のホットな考古学の話題をテーマにした講演会「日本考古学」スタート。第1回は135名が参加した「日本考古学1988」
・第2回総会と同日に行われた初の泊りがけ遺跡見学会「大室古墳群と善光寺平の遺跡を訪ねて」開催。参加者36名
- 1991 ・第10回考古学ゼミナール「論争と考古学PARTII」韓国へ初の海外遺跡見学会開催。4泊5日で35名参加。団長大塚初重教授、副団長熊野正也主任学芸員
- 1992 ・第2代会長に土屋哲旺氏就任
・「筒形銅器研究会」発起人会



第1回考古学ゼミナール（1987年）

<第2期> ボランティア活動の本格化

- 1994 ・「古文書を読む会」発足
・考古学博物館図書室管理ボランティアが発足
- 1996 ・第20回考古学ゼミナール「考古学の未来を語る」田中琢講師ほか
・「市民が語る考古学」で会員の研究発表を行う。
・会員数が400名に達する
- 1998 ・友の会シンボルマークが完成
・考古学博物館展示解説ボランティアが発足
・考古学博物館友の会が10周年を迎える。『明治大学考古学博物館友の会創立10周年記念文集』刊行



初期の展示解説研修（1998年）

<第3期> 研究グループの活性化

- 1999 ・刑事博物館蔵の江戸時代の法制史料「官中秘策」の解読作業と筆写ボランティアを目的とした「資料を後世に伝える会」発足
・博物館入門講座受講者の有志による商品陳列館「工芸の会」発起集会開催
- 2000 ・第3代会長に藤野正治氏就任
・「弥生文化研究会」、「石器文化研究会」、「工芸の会」が相次いで発足
- 2001 ・第30回考古学ゼミナール「中部高地の考古学 - 山の視点」戸沢充則講師ほか



工芸の会見学会（2003年）

<第4期> 新生友の会発足と活動の多角化

- 2003 ・江戸東京博物館で開催されたボランティアメッセ2003に参加
- 2004 ・アカデミーコモンに新博物館が完成し、刑事・商品・考古の3館が統合し「明治大学博物館」となる
・考古学博物館友の会と刑事・商品各館の分科会が統合し「明治大学博物館友の会」が発足
・「資料を後世に伝える会」が「平成内藤家文書研究会」に名称を変更、「工芸の会」とともに博物館友の会分科会となる
・子どもを対象とした助成事業「夢プロジェクト」の第1回に、延岡市緑ヶ丘小6年の木村桃子さんを招待。特別展「江戸時代の大名」を見学
- 2005 ・国立歴史民俗博物館友の会・国立科学博物館と共催で講演会「新しい弥生時代像を探る」を開催
・「草生水の会」発足
- 2006 ・友の会分科会・会員の研究成果発表会がスタート
・第40回考古学ゼミナール「考古学から見た歴史のなかの子どもと家族・社会」小杉康講師ほか
- 2008 ・明治大学博物館友の会20周年 展示解説ボランティア発足10周年



国立歴史民俗博物館特別見学会（2007年）
役職名等は、すべて当時のものです。

参考文献：明治大学考古学博物館友の会 1988 「明治大学考古学博物館友の会10年の歩み」『明治大学考古学博物館友の会創立10周年記念論文集』
島田和高 2006 「新生明治大学博物館友の会」『ミュージアム・アイズ』第43号 明治大学博物館

このように友の会の20年を振り返ると、冒頭に触れた講演会・見学会の自主的な企画・運営、ボランティア活動や研究会の端緒は、そのいずれもがすでに設立から5年の間に始まっていることが注目されます。これは会のスタートの段階から、会員の見識と意欲が非常に高かったことを示しています。また、その芽を着実に育て発展させたのがその後の10年であり、新博物館友の会発足後は、また新たなステージを目指していることがわかります。こうした日本全国の博物館友の会の中でも先進的な活動を20年も維持し続けてきたのは、ひとえに役員はじめ各会員の努力によるもので、高く評価されるものです。明治大学博物館としてもサポート体制をさらに充実するよう努めるとともに、友の会のより一層の発展が期待されます。

関連イベント

設立20周年記念式典及び記念講演会

2008年5月10日（土） 会員以外は別途料金が必要です

設立20周年記念展覧会 「友の会20年の歩みと会員・各部会の収蔵資料」

主催：明治大学博物館友の会 入場料：無料 会期：2008年7月9日（水）～7月29日（火）
会場：明治大学博物館特別展示室（明治大学アカデミーコモン地下1階）
内容：設立以来の友の会の歴史をパネルなどで振り返るとともに各会員や分科会の研究成果や収蔵資料を展示します。

お問い合わせ

03-3296-4448
明治大学博物館内
明治大学博物館友の会

ミュージアム・アイズ50号までの軌跡

博物館の広報紙「ミュージアム・アイズ」が創刊以来50号を数えました。刑事・商品・考古学の3つの博物館が合同して広報紙を発行するようになってから足かけ14年。その紙面を振り返ると、その間の博物館発展の歴史が垣間見られます。

第1号が発行されたのは1995年の4月。年4回の季刊紙ということで春号として発行されました。編集長は考古学博物館の黒沢浩学芸員（現南山大学准教授）。非常勤職員3名が編集作業にあたりました。表紙の題字と絵は下澤なおみ（旧姓竹本）さんの筆によるもの。季節感ある可憐な花が各号の表紙を飾りました。また、発行に際して博物館のロゴマークを考案することになり、事務局メンバーによるコンペで選ばれたデザインは、現在のロゴマークの前身となりました。表紙には無記名でしたが編集長による巻頭言、本文は3館の紹介にコラムが「博物館界隈」「本の虫」「Objects」「展覧会見聞録」の4本と年間予定表が収録されました。第2号で早くも紙面に変化が出て、「MUSEUM NEWS」と収蔵資料のテレビ放映や書籍への掲載を知らせる「メディアに載った博物館」「博物館活動の記録」が掲載されるようになりました。第5号からは好評だった「大学博物館めぐり」のコラムが始まります。最初に取り上げたのは北海道大学水産学部水産資料館でした。

第6号から編集長外山徹学芸員（商品陳列館）・副編集長島田和高等学芸員（考古学博物館）の体制に代わります。第9号の特集は特別展「ヨーロッパ拷問展」の紹介。10・11号と見学者の意見・感想を掲載し、12号の行事報告と合わせて、この年度は毎号同展が紙面を飾ることになりました。この10数年の中で

も、それだけインパクトのあるイベントだったと言うことでしょう。

10号からは3館の担当学芸員4名が交代で編集長を務めることになりました。その10号で問題が発生しました。その年の3月に表紙絵を担当していた下澤さんが退職することになり、春号までは間に合ったのですが、夏号では表紙用の挿絵が無いというピンチに陥ります。結局、この号にはA君の絵日記から転載したとされる、各号の表紙と較べて異質な図柄が表紙を飾ることになりました。ちなみにA君が誰かは残念ながら不明のままです。秋号は紅葉、冬号はさざんかの絵柄をどこから持ってきたのか何とか急場をしのぎ、13号から表紙のデザインを変更することになりました。タイトルの背景にある図柄は旧記念館の丸屋根をイメージしたもので、カットは熊野正也事務長（当時）が担当し、



第1号

魚の絵が掲載されるようになりました。土器の実測図を髣髴させるシャープな線が印象的な魚の絵でした。この頃から連載コラムは「大学博物館めぐり」「本の虫」「収蔵室から」の3本に定着し、特集記事は、春号は3館案内、秋号は行事案内、冬号は活動報告が定着しましたが、夏号の特集ネタをひねり出すには苦心していました。

21号からしばらくは、「学習グループの紹介」が掲載されます。これは、考古学博物館友の会のメンバーをはじめ、一般社会人の有志者によって定期的に各館で開催されている学習会を紹介したのですが、今日の博物館友の会の部会活動に継承されています。

25号からは再び表紙デザインを変更。創刊当時の題字が復活します。タイトル背景の図柄にはリパティタワーの上層階のシルエットを小さく入れました。イラストの表紙カットは残念ながら終了。表紙には収蔵資料や館内風景の写真が収まりました。31号では早くも新博物館（現在の博物館）の特集。まだ開館より1年半以上も前のことでしたが、その頃には部屋割りなど設計は着々と進んでいました。翌年夏の34号では新しい常設展示室の紹介、35号ではミュージアム・ショップや特別展示室など、大学会館の3館時代にはなかった新しい機能の部屋が紹介され、新博物館への期待の高まりが感じられます。10月いっぱい3館は閉館。それに伴い冬号の発行は見合わせました。収蔵室・図書室の移転、常設展示の列品、ガイドブックの校正、開幕記念特別展の準備と猛烈に忙しい中で編集された36号は新博物館紹介号として開館直前の卒業式当日に発行されました。表紙にアカデミーコモンのシルエットを配した春号は、冬号に代わる2003年度予算の最終号でしたが、この表紙デザインは結局1回のみ使用となってしまいました。というのは...



第9号



第10号



第13号

印刷、表紙も専門のデザイナーがデザインしました。中央に展示資料とその解説を配置、下部には9名の人が並んだシルエット。展示を見ている人々をイメージしたということです。連載コラムは「収蔵室から」と、「メディアに載った博物館」が「来た・見た・聞いた明治大学博物館」とネーミングを変えて継続されました。次の38号からは新博物館の目玉であったミュージアム・ショップのグッズを紹介する『「エムツー」カタログ』や、新規開館と同時に3館の友の会と学習グループが合同して再出発した明治大学博物館友の会による「博物館友の会から」が新たなコラムとして加わりました。この年の春号は前年度予算で刊行されていたので、2004年度以降は夏号からはじまり年度末の春号は、従来、入学式を目指して刊行されていたものが、卒業式を目標に刊行することになりました。

41号には東京都埋蔵文化財センターとの共催展の特集記事が掲載され、外部の識者に対するインタビュー記事が新たに加わりました。初回は大英博物館の元日本部長ヴィクター・ハリス氏。4月から半期で特別招聘教授として来日されていました。この頃から、特集記事は展覧会の紹介が多くなります。43号の特集テーマは博物館友の会。新博物館開館後、各種行事の開催やボランティア活動など、博物館における友の会活動の比重も年々高まってきていました。そして、3年を節目に変更していたデザインですが、49号からは思い切って内容も大幅にリニューアルすることになりました。広報紙としてお知らせや短いコラムだけ載せるのではなく、読み物として読みごたえのあるものを提供しようということになりました。それから、各学部の先生方との提携による展覧会や調査活動なども盛んにおこなわれるようになって来たため、先生方にも文章を書いていただくということになりました。こうして、ページ数は大幅に増やして16ページ立てし、連載記事として「展示&リサーチ」「市民レクチャー」「学芸研究室から」、コラムとして引き続き「収蔵室から」が掲載となりました。



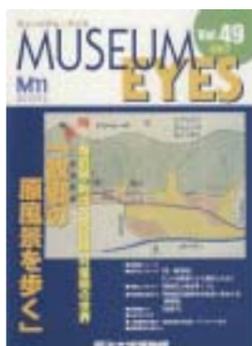
第31号



第36号



第37号



第49号

創刊以来の特集記事一覧

- | | | |
|--|--|--|
| <p>1995年度</p> <p>1 (3館紹介)</p> <p>2 われら大学博物館</p> <p>3 (3館行事案内)</p> <p>4 江戸時代の延岡展</p> <p>1996年度</p> <p>5 明大三博物館風景之図</p> <p>6 入門講座</p> <p>7 (3館行事案内)</p> <p>8 明大博物館の図書室 / 博物館の知られざる脇役たち</p> <p>1997年度</p> <p>9 刑事博物館特別展 ヨーロッパ拷問展 人類の権利・自由を考える</p> <p>10 夏休みの博物館 / ヨーロッパ拷問展を見て私はこう思いました 意見・感想集</p> <p>11 (3館行事案内)</p> <p>12 (3館行事報告・紹介など)</p> <p>1998年度</p> <p>13 明治大学博物館へようこそ</p> <p>14 博物館ボランティアとは何か? / 学芸員になるには</p> <p>15 秋の博物館行事特集号</p> <p>16 写真で見る博物館の1998年</p> <p>1999年度</p> <p>17 明治大学には博物館があります</p> <p>18 明治大学考古学博物館友の会</p> <p>19 秋の明治大学博物館アラカルト</p> <p>20 写真で見る博物館の1999年</p> | <p>2000年度</p> <p>21 20世紀と明治大学博物館</p> <p>22 夏休みのお茶の水 遊ぶ・学ぶ</p> <p>23 秋の博物館 イベント紹介!</p> <p>24 3博物館のあゆみ / 刑事博物館特別展展覧会のご案内</p> <p>2001年度</p> <p>25 この時期 この館 ここに注目!</p> <p>26 学芸員のこと</p> <p>27 秋の明治大学博物館アラカルト</p> <p>28 写真で見る博物館の2001年 / 博物館の社会貢献早分りデータ集</p> <p>2002年度</p> <p>29 明治大学博物館案内双六</p> <p>30 ガイドツアー</p> <p>31 2004年春... 明治大学博物館はリニューアル・オープンします</p> <p>32 カルタでつづる</p> <p>めいだいはいくつつかん / 2002年の生涯学習振興事業</p> <p>2003年度</p> <p>33 リニューアルまで残すところ1年... 博物館施設の変遷</p> <p>34 これがアカデミーコモンの博物館だ!</p> <p>35 こんなにつかえる! 新博物館の機能と役割</p> <p>36 ようこそ 新装なった明治大学博物館へ!</p> | <p>2004年度</p> <p>37 国際学術会議 SUYANGGAE and Her Neighbours 開催!!</p> <p>38 メイキング・オブ・NEWミュージアム</p> <p>39 文部科学省委託事業白雲なびく駿河台地域子ども教室</p> <p>40 博物館の世界の入り口、展示室に行ってみよう!</p> <p>2005年度</p> <p>41 特別展『江戸大屋敷を発掘する。』</p> <p>42 特別展 江戸時代の大名 ~日向国延岡藩内藤家文書の世界~</p> <p>43 新生! 明治大学博物館友の会 ~友の会活動の今・昔を語る~</p> <p>44 博物館発信の講座で学びはじめ</p> <p>2006年度</p> <p>45 明大生と博物館</p> <p>46 特別展 掘り出された 子どもの歴史 石器時代から江戸時代まで</p> <p>47 黒耀石のふるさと鷹山遺跡群へようこそ!</p> <p>48 春季特別展 ガウランド日本考古学の父</p> <p>2007年度</p> <p>49 特別展 明治大学所蔵村絵図の世界「故郷の原風景を歩く」</p> <p>50 明治大学博物館友の会20年の歩み / ミュージアム・アイズ50号までの軌跡</p> |
|--|--|--|

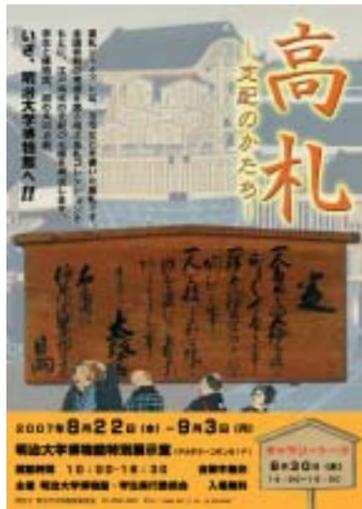
高札

支配のかたち

竹原 万雄 (明治大学博物館非常勤職員)

はじめに

高札とは、法令を墨で書いた板札である。明治大学博物館刑事部門の常設展示室には、現在6点の高札を展示しているが、本館では、その他にも特徴ある内容や様式をもった高札をおよそ80点所蔵している。そのうち、2006年度前期段階までに関しては、『明治大学博物館研究報告 第12号』(明治大学博物館事務室、2007年)において総目録を公開した。これに引き続き、2007年8月22日から9月3日に学生実行委員会と博物館スタッフが共同で作り上げた「高札 支配のかたち」展を開催した。この本館所蔵高札の一連の公開過程は、大学博物館として以下の3点を意識して実施したものである。第1は、学術的利用にもたえうる収蔵資料の情報を最大に引き出すような整理・目録化。第2は、大学の知を社会に還元することを目的とした市民にも分かりやすい展示。第3は、展示の作成をととした学生への教育機会の提供である。ここでは、この公開事業の前提となった高札研究の現状と、本館所蔵の高札から見出される今後の高札研究の可能性について考えてみたい。



1. 「高札 支配のかたち」展ポスター

1 高札の研究

まず、高札の概要を確認しておこう。高札による法令揭示は奈良朝末期からみられ、鎌倉期以降も引続き用いられながら江戸時代に全盛をきわめた。江戸時代が高札全盛時代と位置づけられるのは、寛文元(1661)年6月に幕府により5枚の高札が発せられてからのことである。以後、延宝2(1674)年2月、天和2(1682)年5月、正徳元(1711)年5月にもそれぞれ5枚の高札が立てられた。とくに正徳元年に発せられた「忠孝札(親子兄弟札)・キリシタン札・毒薬札・駄賃札・火付札」と称される5枚は、代表的な高札として全国各地に立てられ、駄賃札が物価との関係で改定されるものの、その他は幕末まで維持された。続く明治政府も、当初は高札による法令公布形式を採用し、「五榜の揭示」をはじめ、いくつかの高札の揭示を指示した。しかし、高札は維持管理などの費用がかさむことや、近代ではよくみられるようになった長大な法令文を記すのに不適切であることが問題とされ、明治6(1873)年2月には高札の原則的撤去が命ぜられたのである。それでは、このような概要も明らかにした高札に関する研究は、これまでどのように展開してきたのであろうか。大きく2つに分類して紹



2. 日本橋高札場の風景 (資料No.544、当館蔵)

介しよう。

1つは、支配者からみた高札論であり、とくに高札の役割が追究された。高札は、人が多く集まる場所に掲示され、人びとに法令の内容を知らせた。かな混じりの簡潔な条文で記された高札の本文からは、法令をわかりやすく伝えようという意図がみとれる。しかし、高札には、単に法令の内容を知らせるというだけに止まらない役割があった。高札本文の内容には、キリシタンや火付の取り締まりに代表されるように、法令違反者を訴え出た者に懸賞金を渡すというものが多くみられる。ここから高札には禁止事項を伝えるだけではなく、法令違反者の逮捕を促進するような役割が期待されていたことがわかる。また、高札の管理に目を向けると、2の錦絵にあるように江戸日本橋の高札場は、人の背丈以上に石垣が積み上げられており、威圧的な印象すら感じられる。村においても、高札の作成や高札場の修復は村が勝手に行えたわけではなく、支配者とのやりとりの上ですすめられた。このように高札は、厳重に管理されており、支配者の権威を強調する象徴的な役割も果たしていたのである。もう1つは、村からみた高札論である。村にとって高札場は、距離を表示するときの起点であった。これは、高札場が村の中心であるとい

う政治的な重要性をもっていたことによる。また、高札を行政的に独立した村であることの象徴としていたことなどから、村が高札場や高札に独自の意味を与え、主体的に維持していこうとしていたことが指摘されている。このように、高札に関する研究は着実に蓄積されてきたが、これらは主に高札の文面あるいは文書史料を用いたものであった。しかし、文字によって語られる内容ばかりでなく、高札の現物を見ることで気付かされる情報もあるのではなからうか。そこで、以下では幕府あるいは明治政府が出した高札の様式に注目して、高札研究の可能性を探求してみたい。

2 高札の様式

本館所蔵の高札を見る限り、「表題」「本文」「年月日」「発給主体」を記した駒形(うまがた)の板札に、雨を防ぐ「屋根」、掲示のための「吊るし金具」、板の補強のための「裏木」を付した構成が、高札の基本的な様式であったようである。3は、本館所蔵の高札の内、基本様式に最も近いものの一つである。この写真にあるように、多くの高札の表題は「定」あるいは「覚」となっている。「五榜の揭示」が出された時の定義によると、「定」は永年揭示、「覚」は当面する重要法令を暫定的に掲げる際に用いられた。また、発給主体に関しては、幕府が出したものは「奉行」、明治政府のものは「太政官」と



3. 「五倫の道を正しくすべきこと等に付」の高札 (資料No.70、当館蔵)

記される。写真では、「太政官」とあるが、それに続けて「日向」とも記されている。写真の高札の裏面をみると、「能勢郡福地村」とあり、高札が立てられた村名が記されている。この村の領主は、高槻藩主永井日向守直諒(な おまさ)であった。つまり、「日向」というのは、この高札が立てられた地域を統治する領主を指していたのである。このように、幕府や明治政府により出された法令に「幕府(あるいは明治政府)から以上のように法令がでたため、きちんと守ること」等の文面を付けて領内に発給した主体を、本館の目録では「第二発給主体」と称することにした。

3 法令伝達につかわれる高札

一方、本館では基本様式に基づいたものばかりでなく、実に多様な様式の高札を所蔵している。なかには一風変わったものもみられる。4は、浪人の取り締まりについて記された高札である。しかし、この高札は駒形ではなく長方形で、しかも屋根もなく3に比べて非常に簡単に作られたように見受けられる。ここでとくに注目すべきは、表題部に「大目付江」と記されていることである。「大目付」とは、各藩への法令伝達を一つの任務とする幕府の職名である。さらに、この高札の末尾には、「以上の内容を触れ知らせ、なおかつ板札に記し、高札場あるいは村役人宅前などへ掲示する

ようにすること」と記されている。高札に記す法令は、一般的に老中から大目付を経て諸大名へ渡されるというルートがあった。そのため、この高札は、高札に記す法令を老中から大目付へ指示する過程で用いられたものであると推察される。そのように考えれば、簡易に作られた理由も理解できよう。しかし、これが法令を大目付へ指示する際に使われたものであるならば、なぜわざわざ文書ではなく高札を用いたのであろうか。これが近世における法令伝達形式の一つとして位置づけられるのであれば、新たな高札の役割が見出されることとなる。

おわりに

高札は、支配者の権威の象徴であり、かつ独立した村であることの象徴であったことを考えると、高札の様式、さらには板札に法令を記し触れ知らせるという行為自体にも何らかの意味があることが想定されよう。多様な様式の高札を分類・整理し、それぞれの様式の意味を追究していくことで、高札の新たな役割だけでなく、その背景にある支配者の意図、村社会のあり方などを発見し得るのではなからうか。ここに高札研究の可能性が見出される。本館所蔵の高札が、その一助となることを願う。



4. 「浪人取締に付」の高札 (資料No.62、当館蔵)

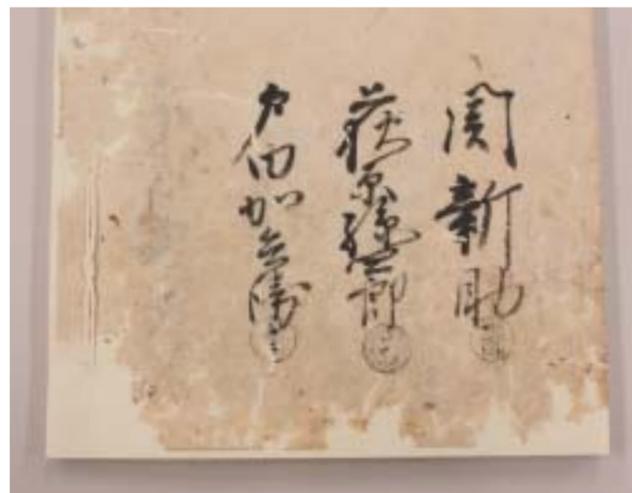
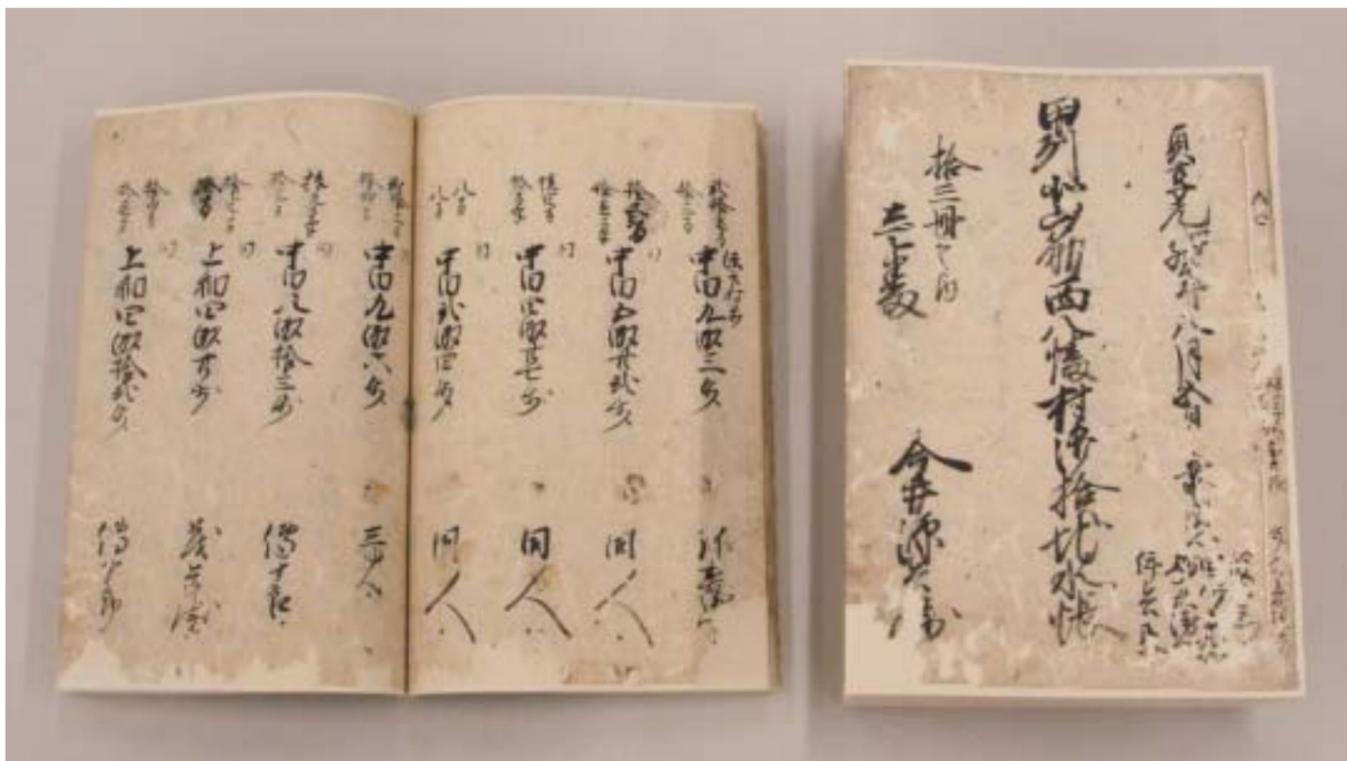


5. 展示風景

貞享元年(1684)8月 甲州北山筋西八幡村御検地水帳 (山梨県)

今回、著しい虫損状態で収蔵されていた江戸時代前期の検地帳の修復が完了しました。

この検地帳の裏表紙を見ると3名の人名が記されていますが、その内の「関新助」という人物こそ和算の大家として名の知られるかの関孝和その人なのです。そこで、研究の第一人者でいらっしゃる佐藤賢一先生に、関孝和と検地帳との関わりについてご寄稿をいただきました。



裏表紙に見える「関新助」の名



綴じ目部分に押された関孝和の黒印

軍綱吉の世嗣となり、六代將軍家宣となる人である。これに付き従って西の丸入りしたことで関は幕臣という身分に落着く。これが関孝和と甲府藩のつながりだったわけであるが、それでは、関はどのような職務を甲府徳川家中でこなしていたのであろうか。

関の役職は甲府藩の分限帳などによると、勘定方の中堅ポスト（御賄頭、あるいは御勘定之方御用改）であったことが分かる。同僚藩士の俸禄管理など、くだけた言い方をすればいわゆる「そろばん勘定」が日常業務だった。（例えば同藩に仕えていた新井白石の日記にも、関の名を載せた俸禄に関する書類の写しが収められている。）とりわけ、藩の一大事業であった検地では、関をはじめとする勘定方の役人たちがこれに動員されていたことはいうまでもない。甲府藩の検地は、寛文・延宝年間（1661 - 81年）と貞享年間（1684 - 85年）に断続的に実施されている。しかしながら検地が農民に税負担の増加を強いる政策であることはいうまでもない。案に違わず、甲府藩でもこの検地をきっかけとする危機的な状況が出現した。寛文年間の検地に対して1672年、負担増を強いられた農民達が強訴の挙に出たのである。このときには家老クラスの重臣や現地の代官らが責任を問われて追放や閉門の処分を受けている。一方、このような藩を挙げて大変な時期に、関孝和は趣味と言われても仕方のないような算術書『発微算法』（1674年）を刊行している。

さて、ここで検地帳そのものの話題に戻ると、これは貞享元年（1684年）に甲府藩が実施した検地において作製された帳簿である。対象となっている西八幡村は現在、甲斐市域（旧竜王町）となっている。検地の具体的な作業は、村の田畑を一筆ごとに測量して名義人を確定し、その格付けをする。これを領内の全村で実施するわけだが、その過程で作製されたのがこの帳簿である。仔細に紙面を見ると、「孝和」と読める黒印が、末尾の署名部分ばかりではなく検地帳のあちこちに捺されている。確かに関孝和は勘定方の役人として、1684年の検地関連業務に携わっていたことがこれによって分かるのである。だがその役務を見る限り、数学者としての華々しさというよりもむしろ、地味な仕事に徹する官吏としての姿の方が眼前に浮かんでくる。

その生涯に関してほとんど何も、生まれた年すら知られていない関孝和。そのような関孝和にあって、今のところ唯一、この検地帳が生前その手で触れられたことを直接的に示す史料である。甲府藩が検地に起因する受難の時代を迎えていたまさにその時、数学者としての関は自らの研究を大成しつつあり、後には検地そのものにも関わっている。そのようなことをあれこれと追ってみると、一冊の帳簿でありながら、それが担ってきた300年という歳月の重みにあらためて思いを致さざるを得ないのである。

関孝和と検地帳

佐藤賢一（電気通信大学准教授）

今からちょうど300年前、和算家として著名な関孝和（? - 1708）が没している。近世日本の数学のレベルを飛躍的に高めたといわれている関孝和。今年はその没後300周年ということもあり、彼の業績の再評価作業が各方面で進んでいる。

関孝和は17世紀当時、代数学や幾何学の分野において、世界的なレベルで見ても決して引けをとらない業績をあげた人物である。代数学では独自の記号法を編み出して和算による方程式論を整備し、幾何学においては様々な図形問題を解いているが、とりわけ円周率の算出法に画期的な技法を導入している、等々。著作には、公刊されたものに『発微算法』（1674年）弟子による死後出版に『括要算法』（1712年）があり、他にも数点、写本の著作が残されている。さらに関の数学の後継者達は、後に「関流」と称する一大流派を築いている。このようなことを書き連ねると、いかにも関孝和は浮世離れした孤高の数学者であったというイメージだけになるのではないかと恐れている。人間としての関孝和の姿が、どう

も今一つ見えてこないのである。

このことについては致し方ない事情もあった。関孝和の本姓は内山氏で、後に関家の養子となっているが、詳細な家譜も残されておらず、しかも孝和の次の代で関家は断絶してしまったがために、歴史に痕跡すら残せなかったのである。

そのようなわけで関孝和の自筆稿本や書簡の類が全く確認されていない中、関が公的な活動をしていたことを明確に示す史料がわずかに数点ではあるが奇跡的に残存している。その史料とは明治大学博物館に収蔵されている甲斐国内の検地帳、『甲州北山筋西八幡村御検地水帳』（1684年）である。ここで当然ながら起こる疑問は、甲斐国の検地帳になぜ関孝和が関連しているのかというその一点であろう。

関孝和は晩年の1704年に幕府の御家人となっているが、それ以前、つまり生涯の大半にわたって仕えていたのは、甲府徳川家の綱重・綱豊の二代であった。（この二代による甲府藩の支配は1651年から1704年に及ぶ。）後者の徳川綱豊は五代将



修復前の状態
写真提供：
有限会社紙資料修復工房



虫損部分に紙繊維を充填するリーフキャスト処理により修復しました
写真提供：有限会社紙資料修復工房

黒耀石と考古学（2）

- 鷹山遺跡群に集った旧石器時代人たち -

安蒜 政雄（文学部教授）

I 旧石器時代人の移住

関東の平野部に残された遺跡の層位的な石器の出土例を観察すると、日本列島の旧石器時代は、五つの時期に分かれる。古い順に、まず、ナイフ形石器の形と種類が変化する三つの時期がある。第I期、第II期、第III期とする。これに、ナイフ形石器が槍先形尖頭器と交替する第IV期がつづき、細石器が現れる第V期で終わる。第I期の石器が出土する地層は立川ロームの下底部で、いまのところ、より古い武蔵野ロームから石器群が出土する例はない。

ナイフ形石器と槍先形尖頭器それに細石器は、どれもがみな槍の穂先であったと考えられる（第1図）。そこで、日本列島の旧石器時代を槍の文化史とみて、穂先の更新を目安とし、第I期から第III期までを合わせてナイフ形石器文化、第IV期を槍先形尖頭器文化、第V期を細石器文化と呼ぶ場合も多い。各時期と文化の古さは、3万数千年前から1万数千年前までの期間内に途切れることなく連続し、世界的にみると、前期・中期・後期の三時代に分れる旧石器時代の後期に該当する。

ただし、それら文化の三階梯は、日本列島のどこでもみられるわけではなく、地域ごとに差がある。その地域差を対比すると、前期・中期・後期に細分される旧石器時代前半のナイフ形石器文化と、同じく前期・中期・後期に区分できる旧石器時代後半

の細石器文化とに、大別されてくる。また、ナイフ形石器文化の後期と細石器文化の前期が、第III期で重なり合う。そして、槍先形尖頭器文化は、第IV期の日本列島中央部に閉ざされたかのような位置を占めている（第2図）。

このように、日本人類文化の起源は、後期旧石器時代に遡る。では、三文化を担った旧石器時代人は、どんな背景のもとに、日本列島へと移り住み住み分けて、地域差を生んだのか。日本列島へは、少なくとも新旧の二度にわたる、旧石器時代人の移り住みがあったと考えられる。仮に、旧石器時代人の旧移住と新移住とする。

旧移住は、日本列島に旧石器時代人が姿を現わした第I期の出来事と、約10万年前のアフリカに始まり、現生人類が世界各地へと拡散していった背景がある（第3図）。新移住は、2万数千年前に前後する最終氷期最寒冷期の出来事と、海退によって開いた環日本海旧石器文化回廊を渡った、第III期の移り住みが背景となっている。この新移住には、左回りで朝鮮半島を経由する南方系の移民と、右回りで沿海州を経由する北方系の移民とがあった。前者はスベチルグ系のナイフ形石器（剥片尖頭器）作りを、後者は湧別系の細石器作りを、それぞれ日本列島にもたらせた（第4図）。

II 移住と歴史境界地区

日本列島から発掘された旧石器時代の遺跡数

は、優に一万箇所をうわまわっている。この遺跡数は、東アジアの中でも際立って多い。そうした遺跡の多くは関東に集中し、ことに平野部の河川流域に群れをなす。その関東の平野部では、どの時期にも一定数の遺跡が存在し、遺跡が姿を消す時期はない。関東平野部と同様な、遺跡が恒常的にみとめられる場所は、日本列島内にもいくつかある。そのどこもが、好条件下での狩猟と植物採取を保障された、極めて恵まれた土地であったに相違ない。いわば、旧石器時代の狩場である。

太平洋に臨む関東の平野部、そこは日本列島最大の狩場であった。この広大な狩場に接した赤城山麓は、黒色頁岩や黒色安山岩など石器石材の原産地である。その黒色頁岩・黒色安山岩の原産地を後にして中部高地へ向かうと、黒耀石の原産地にいたる。黒耀石もまた、石器の石材として大いに用いられた。そして、千曲川を下ると野尻湖周辺の狩場をへて、高田平野から日本海に抜ける。このように、本州の中央部には、日本海と太平洋とを結んで、狩場と石器石材原産地が連なる。

この本州中央部は、日本列島内に地域差を生み文化圏がたびたび接触する。いわば歴史境界地区であった。例えば、日本旧石器時代が始まる第I期の下総台地と赤城山麓それに野尻湖周辺といった一連の石器石材原産地と狩場は、時を同じくし、遺跡の一大密集地帯となった。また、第III期の関東平野部は、九州と軌を一にして、遺跡の数が激増する。さらに、第IV期に槍先形尖頭器文化が発達した

のは、中部高地と赤城山麓および関東の平野部であった。そして、第V期を迎え、歴史境界地区は、西の矢出川系細石器文化圏と東の湧別系細石器文化圏が対峙する一帯となる。

そうした事例の数々が、どうして歴史境界地区で起きたのか。それは、新旧の移住と大いに関係している。第I期の旧移住は、北海道に当該時期の遺跡がなく、九州方面から本州を北上した可能性がたつよい。その移住が、歴史境界地区内で一旦留まったようだ。野尻湖周辺では、この第I期の遺跡数が他の時期と比べて一番多い。あたかも、人類拡散の一終着地であったかの状況を呈している。

新移住の南方系移民と北方系移民は、確かにどちらも第III期の出来事であった。ただし、双方が日本列島を北上し南下した速度は、大きく異なる。南方系移民は、同じ第III期に、九州から関東の平野部まで、一挙に人口（遺跡数）を倍増させたほど急速であった。その移民が、歴史境界地区で行き止まり、つぎの第IV期に、当該地区で槍先形尖頭器文化を開花させたと想定される。一方、北方系移民の展開は緩やかで、第III期にはまだ北海道を出ず、第IV期で東北に入り、第V期になって歴史境界地区で、矢出川系の細石器文化圏と接触し、南下が阻まれたらしい（第2・4図）。だが、その矢出川系の細石器作りと移住の新旧との関連性は、なにもわかっていない。

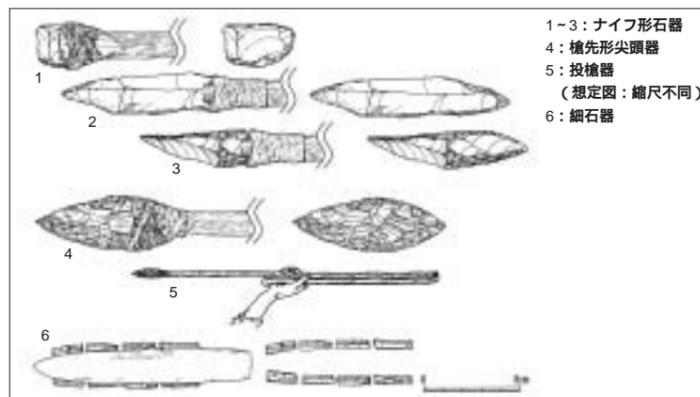
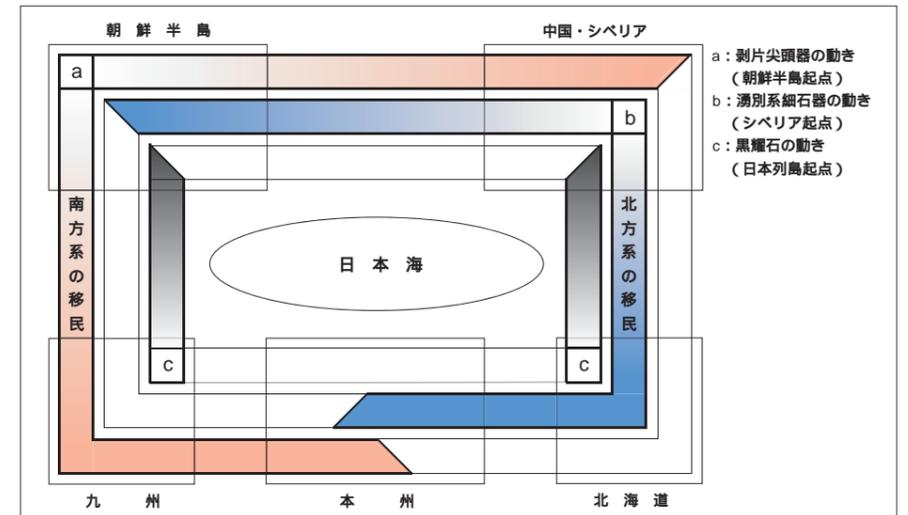
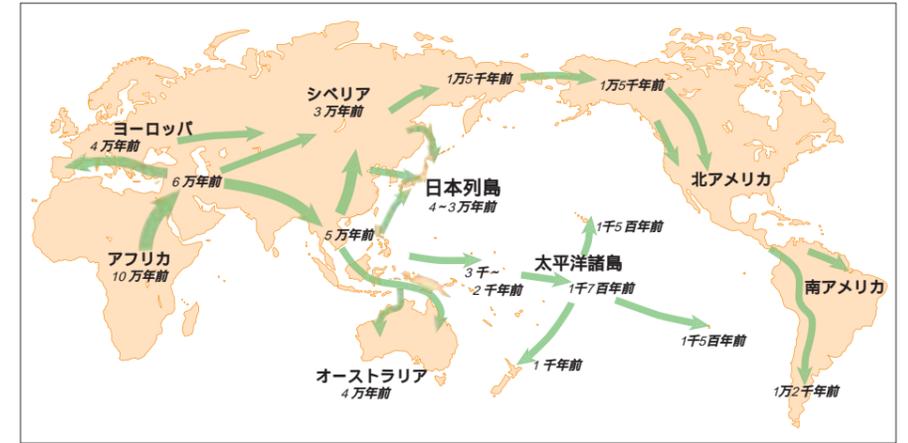
III 黒耀石の利用と旧石器時代史

さて、新旧の移住が行き着き留まり止まった、歴史境界地区の中央には、中部高地黒耀石原産地がある。では、黒耀石は、移り住んできた旧石器時代人によって、どのように利用されたか。原産地の一角を占める鷹山遺跡群に焦点を当て、旧石器時代人が黒耀石と係わった歴史をたどってみよう。

一体、どの時期の遺跡が鷹山遺跡群にあるか。鷹山遺跡群には、第II期と第III期それに第IV期の遺跡があり、石器が作られている。鷹山第1遺跡M地点（第II期）、同第XII遺跡（第III期）、同第I遺跡S地点（第IV期）が、それである。いいかえると、第II期から第IV期にかけての黒耀石原産地は、石器石材の入手地であり、かつ石器の製作地であった。

とはいえ、各時期の石器作りは一律ではなく、作業の規模に差がみとめられる。相対的に小規模な第III期をはさんで、第II期と第IV期の石器作りは大規模。その上、第II期のナイフ形石器作りと第IV期の槍先形尖頭器作りとの間にも雲泥の差があり、後者が格段と大掛かりであった。このように、旧石器時代人が黒耀石の原産地を利用する状況には、第II期・第III期・第IV期で、それぞれ異なる。

一方、第I期と第V期の鷹山遺跡群には、遺跡がない。それは、歴史境界地区で、黒耀石を石材とする石器作りが全くなされた事象の反映なのか。決して、そうではない。第I期には、鷹山遺跡群近辺の長野県追分遺跡などもより野尻湖周辺の長野県日向林B遺跡などで、黒耀石による石器作りが盛んにおこなわれている。同様に、第V期でも、関東の平野部をはじめとした各地で黒耀石が多用された。つまり、第I期と第V期の黒耀石原産地は、石器の製作地ではなかったものの、石器



第1図 旧石器時代の槍と穂先（安蒜 1996）

| 地域 | 九州 | 中国・四国・近畿 | 関東・中部 | 東北 | 北海道 |
|-------|---------------|----------|-------|----|-----|
| 第I期 | ナイフ形石器文化 (前期) | | | | |
| 第II期 | ナイフ形石器文化 (中期) | | | | |
| 第III期 | ナイフ形石器文化 (後期) | | | | |
| 第IV期 | 中期 | 槍先形尖頭器文化 | | | 前期 |
| 第V期 | 細石器文化 | | | | |

第2図 日本列島における旧石器時代の文化と階梯（安蒜 2005）

石材の入手地であった。

では、その第I期と第V期、大掛かりな石器作りについてはどうか。黒耀石を用いた大規模な石器作りが、第I期の歴史境界地区内で営まれた痕跡はない。だが、細石器文化期に入った第V期、八ヶ岳山麓の長野県矢出川遺跡群や関東平野部の千葉県十倉三福荷峰遺跡など、黒耀石原産地を離れた遠く隔った場所に、黒耀石を石材とする大規模な石器の製作地が存在し出す。こうして、第I期と第V期との間でもまた、旧石器時代人による黒耀石原産地の利用状況の違いをみせる。

以上のように、旧石器時代人と黒耀石との係わりは、第I期から第V期へと順次、各時期ごとに在り方を変えながら推移している。その過程には、まず旧移住の団が原石の入手を第一歩とした、ついで新移住南方系移民の団が原石の入手地で直ちに石器作りを開始した、それぞれ日本列島に移り住んで来た、旧石器時代人と黒耀石原産地との最初の出会いが印されている。

そもそも、旧石器時代の五時期は、石器考古学の成果にもとづいて区分されてきた。そして、いま、その五時期区分に対応して変遷する、人類による黒耀石活用の歴史が明らかにされようとしている。これは、視点を変えると、黒耀石考古学が、石器考古

学と並んで旧石器時代の編年さえも可能な、独自の研究体系を備えている確かな証である。

【主な参考文献】

- ・安蒜政雄 2007 『黒耀石と考古学（1）』『ミュージアム・アイズ』49 明治大学博物館
- ・安蒜政雄 2008 『日本旧石器時代の系譜』『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会
- ・新東京国際空港公団・財団法人千葉県文化財センター 2004 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書1010 - 十倉三福荷峰遺跡（空港No.67遺跡）』千葉県文化財センター調査報告485
- ・戸沢充則 1983 『長野県矢出川遺跡群』『探訪先土器の遺跡』有斐閣
- ・長門町教育委員会 2001 『県道男女倉長門線改良工事に伴う発掘調査報告書 - 鷹山遺跡群第I遺跡および追分遺跡群発掘調査 - 』
- ・長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 信濃町内その1 - 日向林A遺跡・日向林B遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡』

Made in Japan の行く末

1. 商品部門の研究分野とは？

明治大学の博物館を構成する3つの部門の中でも、商品部門というのはどのような学問によって裏付けられているのか一番わかりにくい展示であろう。実は最初に商品部門の前身である明治大学商品陳列館の名を聞いた時、即座に頭に浮かんだのは炊飯器や掃除機の展示であった。しかし、実際に来て見ると並んでいるのは漆器や陶磁器である。確かにそれも商品ではあるが...3部門の中で一番わかりやすいのが考古部門である。文字通り考古学の研究素材である埋蔵文化財が展示されている。刑事部門の場合は法制史の中でも刑法に関連する資料、ということになるのだが、収蔵資料の大部分を占めるのは、実際には江戸時代の古文書である。日向国延岡藩内藤家文書や出羽国村山郡を中心とする地方文書など膨大な数を収蔵しているが、これらは日本近世史研究学界によく知られた一級の研究素材である。では、商品部門はどうか？

2. 商品部門の成り立ち

それを考えるには、商品部門の設立経緯に遡らざるを得ない。前身の商品陳列館が設立されたのは1951年、第二次大戦後間もなくである。当時、商学部が在籍されていた林久吉教授らの研究グループは商品研究所を組織していた。大学校舎に一室を借り受け資料室が設立されたのが陳列館の始まりだった。当初の収集資料を調べると、現在展示されている伝統的工芸品がその中心となっていたわけではない。主な収集資料は、木材、皮革、ゴム、撚糸、化繊、合成樹脂といった原材料標本。衣類や履物などもあるが点数は少なく、原材料標本の延長線上に把握していたと考えられる。当時は商品の品質を判定する上で、原材料が重要な要素として着目されていたという事情があった。また、記録によると貿易商品の収集に力を入れたとあり、実際、世界各地の米、コーヒー豆、茶葉などがそれに該当するし、加工食品や香辛料のパッケージなども収集されている。

それが、後年どのような経緯で伝統工芸を展示の主要テーマとするようになったのか、その淵源を辿ると1950年代後半における地方物産品の収集に行き着く。その頃、陶磁器や漆器、郷土玩具などが盛んに収集されていた。まだ東海道新幹線も開業する以前、カラーテレビなども普及していない時代、東京と地方の距離感覚は現在とは全く違ったものがあったと考えられる。各地の物産の実物を実見させるといふことには、現在とは異なった意義があったと考えられる。その後、大学紛争の時代に閉館状態に追い込まれた商品陳列館は、存置検討委員会の決定によって1973年に再興されるが、その際、将来の運営計画が議論された。当時、商品の花形と言えはなんと云ってモカー、クーラー、カラーテレビの3C時代に入っていたが、購入予算の問題もさることながら、館のスペースからして体系的な収集には不向きであることは自明であった。また、そもそも身の回りにあるものほとんどが商品で占められるという時代に、それをどう取捨選択して展示資料とするかは大変難しい問題であった。そこで、採用された方針は、重厚長大産業に関しては映像資料を収集し、実物は従来の地方物産品収集の成果に立脚し伝統的工芸品を扱うというものであった。

3. 伝統的工芸品の展示

その趣旨は、多種多様な「商品」すべてを展示するのは不可能という現実を踏まえ、ある特定の商品を選ぶ必要から、陶磁器や漆器などの伝統的工芸品という枠組を設定したということになる。商品とは何かを提示しようという試みであったが、当時の展示は製品としてどのようなものがどのように出来上がるか、ということまで止まっていた（現在もそうであるが）、製品がいかにして商品になるかという部分を表現するのは、そう簡単なことではなく、また、商品研究との関係も設立当時とは状況が変化し、館の活動自体が商学部の教育研究と乖離する傾向にもあった。私が担当者として着任したのはそのような時期だった。商品研究とは畑違いの分野から上がってきた身として、館の方針としてどのような事情で伝

外山 徹 (商品部門学芸員)

統工芸が取り上げられているか、当初はなかなか理解できていなかった。「商品としての伝統的工芸品」という視点ではなく、伝統工芸としての伝統的工芸品という捉え方をし、最初の2~3年は歴史的な発想から抜けきれなかった。しかし、このことは私自身に限ったことではない。多くの見学者がまずはこうした視点で展示を見ることであろう。つまり、そこには「商品としての伝統的工芸品」という視点が最初からあるわけではないのである。もちろん、これは来館者の落ち度ではなく、的確な視点に立って見学できるようにすることは見せる側の課題である。

4. “商品としての伝統的工芸品” 観

さて、そうした考え方が変わってきたのは、やはり産地に足をこび関係者を訪ねると製品を“売る”話になる経験を重ねてきたことによる。これまで何を作ってきたか今何を作っているかという話から、何が売れなくなって何が売れるようになってきたかという話を関係者とするようになり、特に陶磁器の場合、産地問屋が衰退してメーカー自身が商品開発を強く意識するような状況に直面していること、漆器や染織品の場合、調査にあたって産地組合と受け入れの交渉をおこなうたいてい組合の役員は産地問屋が務めているので、調査の度にそうした話を聞くようになった。とりわけ印象的だったのは、1970年代の観光ブームの時期に観光土産として売っていたものが、現在は売れなくなったということ。だからと言って、観光土産自体が全く売れなくなったわけではなく、コストを下げて価格を抑えるため製造工程を簡略化・合理化したもので、例えば代用漆をスプレー・ガンで吹き付けたようなものが観光土産になっているという話だった。つまり、1970年代と20数年を経た後とで、商品としての伝統的工芸品の性格は大きく変わり、今の話で言えば観光土産とはなり得なくなってしまうということである。一方、生活様式の変化によって日常的に使われなくなってしまったが故に販売実績が低迷していたものもある。その場合、現代の生活スタイル

に合致したものを作ろうという試みが各地で見られるようになってきている。

5. 伝統的工芸品観のギャップの問題

このように、産地を訪ねてみると様々な新しい発見があり、伝統工芸に対する見方が変わっていった。その一方、書籍やテレビで取り上げられる伝統工芸のイメージはあまりにも懐古趣味的であり、製造・流通・販売の現場における伝統工芸の実態と消費者の持つ伝統工芸のイメージが乖離してきていることが気になり始めた。このことは、現在の商品部門の展示設計を難しくしている一因ともなっている。古式ゆかしい工房に住む白髪の名人が、昔ながらの製法で作った作品の出来映えを見ながら納得できるものを選び分けている、というような光景は、商品としての伝統的工芸品を生産する産地の現場においては、全くないわけではないにしろ一般的な光景とは言いがたい。しかし、製品の持ち味を変えない程度に機械工程を導入してコストを下げたり、褪色を防止するために化学染料が導入されたり、洋食器や洋服の製造というような話は、牧歌的なステレオタイプを持っている人々には受け入れがたいものである。とは言え、伝統が受け継がれていくためには、現実も踏まえた理解が必要であり、懐古趣味のみにすがっているはこの業界の将来はないと言えるだろう。産地衰退の要因としてこのことは否定できない側面である。

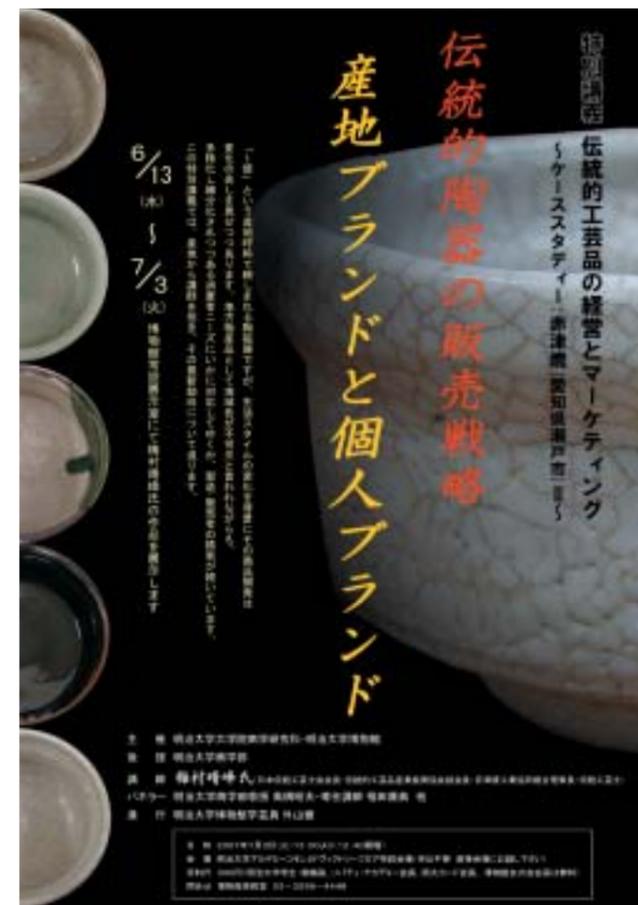
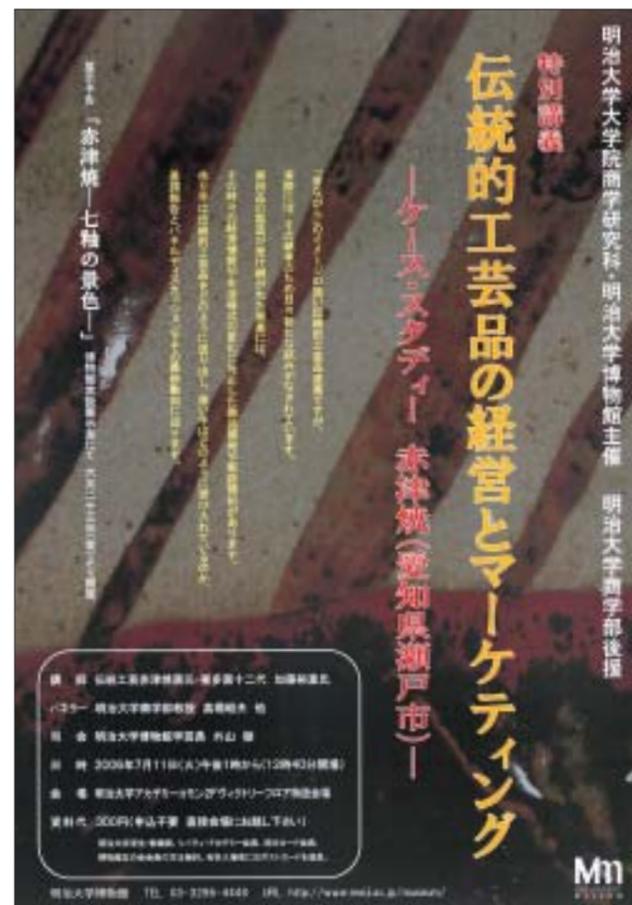
ノスタルジーに浸ることなく、今後、どのように

伝統を受け継いでゆかか考える作業は大変難しい課題であり、それは見学者が容易に理解できるテーマではないのかもしれない。しかし、であるからこそ、大学のような先端研究の場がそれを取り上げ、普及・啓蒙の方策を打ち出してゆく必要があるのではないかと。そこで、ネックとなっていたのは、既存の学問体系のどの分野で伝統工芸を論じるべきかという問題だった。大学の関係者が伝統工芸について論じる機会がなかったわけではない。これまでは、美術史や工業デザインの立場からの研究が見られたが、学史と呼べるような蓄積には至っていない。商品という観点から伝統的工芸品を捉え返すことは一つの新しい挑戦と言えるが、実際、現実と差し迫った問題に対する処方箋は伝統工芸の世界にあると考えている。

6. 伝統的工芸品を学問として捉えるには？

5~6年前に竹細工の産地を訪れた際に顕著であった動向だが、台所用品など安価な日用品はすでに輸入製品が席巻し、国産品は美術作品的な要素を多分に含んだ高級品でなければ売り物にならないということであった。これは、ひとり竹細工の問題でも、伝統的工芸品産業だけでなく、我が国における商品の将来像そのものである。繊維業界による外国からの輸入品に対するセーフ・ガード発動要請が新聞紙上を賑わしたのも束の間、安価な労働力に裏打ちされた商品

の輸入は止まるところを知らない。端的に言って、世界のどこで作ってもよいものは、日本国内では生産できなくなってゆくのである。すると、日本の製造業は廃れるしかないのだろうか？ そうではないとすると、開発されるべき商品は今までとは異なったものとならざるを得ない。製造における高コスト体質を克服できず高い価格帯で商品を売ってゆかねばならない伝統的工芸品は、高付加価値商品としてしか生き残る道はなかったが、それは日本産品がこれから直面する運命を一足先に経験していたものである。すなわち、これからのMade in Japanは何らかの付加価値、日本で生産されたものだからこそ、日本で生産されたものでなければ、という価値付けなしには売れなくなる。その点からすると、むしろ長い伝統文化に裏打ちされた伝統的工芸品こそ、日本の高付加価値の商品を考える上で貴重なケース・スタディーの対象となるのである。そうすると、商品としての伝統的工芸品を考えるためには、商品学のみならず、美術史、工業デザインはもとより文化論なども加えた様々な分野を統合した学際研究の場が必要となってくる。「学際研究」というキーワードは、近年とみに用いられるようになっていくが、それは既存の学問体系が極格化した証であろうし、伝統的工芸品もまたそうした潮流の中で脚光を浴びるべきジャンルであると考えられる。商品部門の調査研究と展示活動において、それを具現化することがこれからの課題である。



商品としての伝統的工芸品を意識した特別講義の開催（2006・2007年）

2007年度秋季特別展

「明治大学所蔵村絵図の世界 故郷の原風景を歩く」を開催しました

9月14日から12月4日まで、途中、展示替の2日間をさした合計80日間にわたり、館蔵の村絵図を用いた特別展が開催されました。当館には、譜代藩内藤家文書以外にも江戸時代の村方文書を中心とする約13万点の古文書が収蔵されていますが、その中には、領主が村の概況把握のために作成したり、土地利用に関する裁判や土木工事に関連して作成された絵図類が1400点余り含まれています。これらの絵図類は今日の地形図や工事図面とは異なり、山は緑に川は水色と、当時の村の様子が情感豊かに表現されているのが特徴です。この展示会は文学部の先生や卒業生の方々との連携によって準備され、景観を通して江戸時代の「村」とは何かを視覚的に学んでいただきました。最終的には2812名の入館者を得、関連の講演会・講座などを通じて、明治大学が取り組んできた村落史研究の成果の一端を披露することができました。現在、展示された村絵図を全点収録した展示図録を頒布中です。



企画展

「日中考古学交流のさきがけ」展を開催しました

2008年1月に奈良県立橿原考古学研究所附属博物館との共催で、50年前の訪中考古学視察団の軌跡を振り返るパネル展「日中考古学交流のさきがけ」展を開催しました。2007年5月に奈良で開催された同名の展示会を規模を縮小して行いましたが、視察団に加わった元本学考古学研究室教授杉原荘介氏旧蔵（現明治大学図書館蔵）の郭沫若氏が直筆した一文が残る書籍や、訪中の際に寄贈を受けた石器レプリカ（当館蔵）など当館オリジナルの展示も加えました。これまでなぜ杉原氏だけが私学から唯一参加したのか明確にはわかっていませんでしたが、郭氏との戦前からの交流や、旧石器時代研究を介した中国文化科学院とのつながりから杉原氏が大きく関わっていた可能性が明らかになるなど、学史を考えるうえで意義深い展示となりました。



< 予告 > 明治大学国際日本学部開設記念特別展

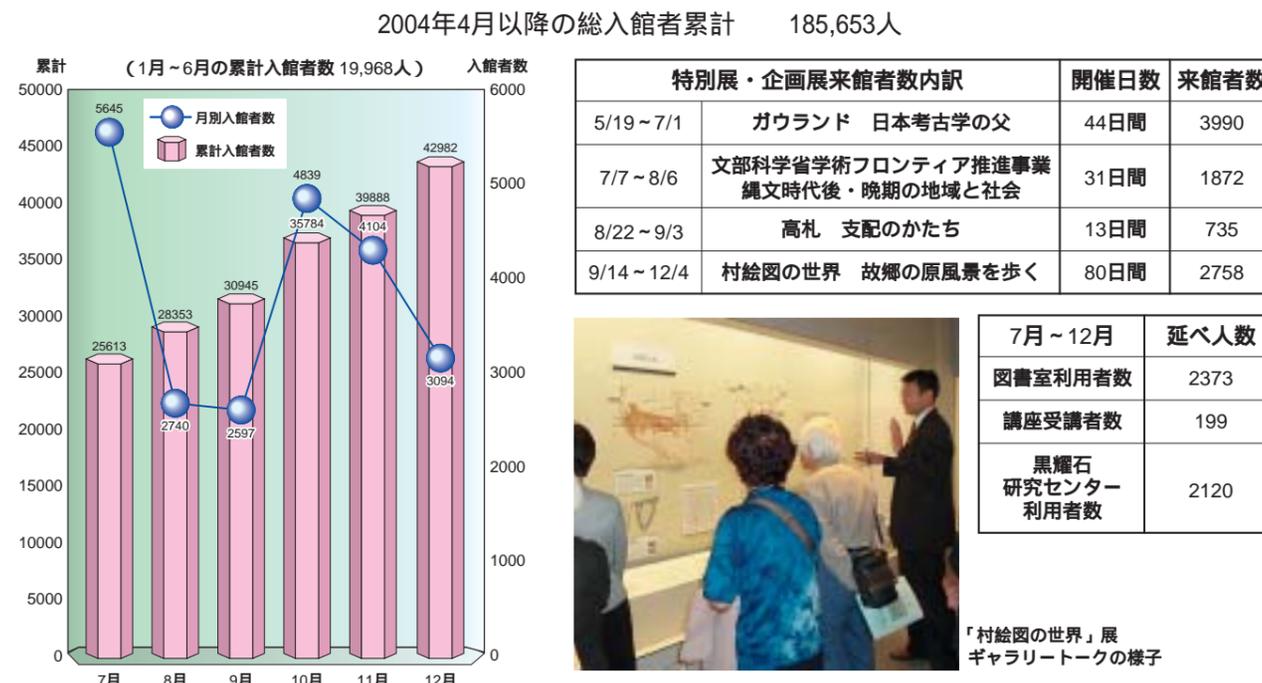
< クール・ジャパン > を科学する 世界が目撃する日本文化

明治大学国際日本学部の開設を記念して、同学部と明治大学博物館が特別展を開催します。「展示」というメディアをとおして、「ものづくり」「伝統文化」「日本文化の発信」「クール・ジャパン」など、国際日本学部の特色を紹介します。

主催：明治大学国際日本学部 明治大学博物館
会期：5月4日（日）～ 5月29日（木）
会場：明治大学博物館特別展示室
入場無料



明治大学博物館入館者数の動き（2007年7月～12月：延べ人数）



団体見学の記録 2007年7月～2007年12月

- 【一般】 230ハイキングクラブ(50名)・浦和高年大学第19期校友会史跡めぐりクラブA(16名)・NHK文化センター町田教室(40名)・日本叙勲者協会(23名)・NHK文化センター ユーカリが丘教室(40名)・朝日カルチャーセンター立川(27名)・NHK学園(19名)・明治大学石川県父母会役員(14名)・小平市中央公民館 シルバー大学第33期(40名)・天童市公民館連絡協議会(15名)・明治大学校友会福井県支部役員(19名)・東京倶楽部(25名)・長和町民大学(43名)・小栗上野介顕彰会(24名)・明治大学法学部38年卒業校友一行(17名)・サンシティFCクラブ(13名)・板橋料好会(38名)・社団法人 東京青年会議所第1地区特別委員会千代田地区(4名)・明治大学校友会立川地域支部(9名)・法務省法務総合研究所 国際協力部(16名)・佐倉市民カレッジ・十期歴史会(15名)・あきる野市民解説員の会(10名)・学校会計固定資産研究会(110名)・東京大学「学生窓口業務担当者講習会」(8名)・読売・日本テレビ文化センター八王子(10名)・江戸を探検する会(10名)・天童市立山口公民館(23名)・全国大学史資料協議会(9名)
- 【小・中学校】 東京都新宿区立戸塚第二小学校(35名)・早稲田実業学校中等部3年生(2名)・宮城県女川町立第4中学校(8名)・明治学院中学校(48名)・東京都杉並区立神明中学校(24名)
- 【高等学校】 岡山県立岡山大安寺高等学校(28名)・聖望学園高等学校2年生(37名)・広島県立尾道北高等学校(2名)・東京都立一橋高等学校(21名)・茨城県立土浦湖北高等学校(37名)・文華女子高等学校(30名)・新潟県立高田北城高等学校(22名)・茨城県立日立北高等学校(43名)・明治大学付属中野高等学校第一学年(137名)・文化女子大学附属杉並高等学校(31名)・茨城県立並木高等学校(41名)・長野県松本壺ヶ崎高等学校(34名)・大分県立大分鶴崎高等学校(42名)・埼玉県立久喜北陽高等学校1年生(40名)・埼玉県立久喜高等学校1年生(10名)
- 【大学・大学院・専門学校】 外語ビジネス専門学校(43名)・桜美林大学(10名)・シアトル大学(60名)・日本文化大学(7名)・明治大学文学部「歴史時代の考古学」受講生(40名)・日本大学史学会(20名)・明治大学経営学部(31名)・帝京大学法学部(40名)・立教大学大学院(教育学研究科)官部ゼミ(3名)・南山大学(17名)・成蹊学園史料館(7名)・徳寺大学学術学部博物館履習生(8名)

M2カタログ

ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。第11弾はネクタイをご紹介します。



このネクタイの柄をよーくご覧ください。さまざまな形の土器が並んでいるのがお分かりいただけるでしょうか？これらは、日本で米づくりが始まった弥生時代の土器、それも東日本の土器をモチーフにしています。当館にはそのモデルとなった土器が展示されています。このネクタイを締めて、首元を弥生時代の造形美で飾りましょう。

カラー：赤（土器柄）
十手柄もあります。
価格：5,000円

売り上げベスト3
(2007年7月～12月)

- 1位 特別展「明治大学所蔵 村絵図の世界 故郷の原風景を歩く」図録 1,500円
- 2位 『常設展示案内ガイドブック』 800円
- 3位 ポストカード「ニュルンベルクの鉄の処女」 90円

2008年度博物館友の会の活動から

博物館友の会は今年の6月に創立20周年を迎えることとなります。

この記念すべき年に当たり、20年間の友の会活動を踏まえて、将来の飛躍につながるような行事を種々予定しております。

まず、5月10日(土)に年次定例総会と記念式典および記念講演会を開催します。記念講演会は友の会創立以来、絶大なご指導・ご支援を賜りました、明治大学大塚初重名誉教授から、「これからの博物館友の会」についてお話を聞くことにしております。

考古学博物館友の会の発足時からの恒例の講演会「日本考古学2008」は4月12日(土)に開催されます。この講演会は最近の考古学の主要な話題について、明治大学考古学研究室・博物館の先生方を中心に一般向けに解説していただくもので、毎回好評を得て、マスコミなどからも注目されています。今年は文学部石川日出志教授、佐々木憲一准教授、高瀬克範専任講師などによって、東日本では珍しい銅鐸が出土した長野県中野市の柳沢遺跡、末盧国かとされる桜馬場遺跡などをはじめとして、縄文時代から古墳時代までの最近の話題について話していただきます。

7月9日(水)から25日(火)まで、博物館特別展示室で、「友の会創立20周年記念展覧会」を開催します。この展覧会は「友の会20年の歩み」と「会員の製作品、研究品、収集品」などを展示します。

また、秋には記念特別見学会として、石川県能登半島の真脇遺跡などの縄文時代の遺跡を中心にした見学会を2泊3日で予定しております。

20周年記念関連行事としては、以上の他に、会員発表

会、特別講演会・フォーラムを秋に開催予定しております。そして、会の内外から寄稿いただき、「20周年記念誌」の発行も予定しております。

また、記念特別見学会以外にも、見学会は友の会の主要な行事でありますので、博物館の特別展と連携した見学会をはじめとして、考古学関係だけでなく、博物館の関係するいろんな分野の見学会を予定しております。

また、記念特別見学会以外にも、見学会は友の会の主要な行事でありますので、博物館の特別展と連携した見学会をはじめとして、考古学関係だけでなく、博物館の関係するいろんな分野の見学会を予定しております。

昨年の熊野正也顧問の講演会で、これからの「友の会の進むべき道」の一つとして他の博物館友の会との連携・協力を挙げておられますが、志を同じくする近隣の他館友の会と協力関係を築き、私達の友の会だけでは困難なプログラムを可能にして、会の活動の内容充実にも努めます。現在、講演会、見学会などいくつかのプログラムについて調整中です。

友の会は、種々の活動を通じて会員の皆さんに博物館を一層身近なものとして親しんでもらえ、皆さんの学習の手助けになる友の会を目指しています。そして学んだことを活かして博物館の活動に協力できるように、友の会はお手伝いします。

それぞれの行事の詳細は今後の「友の会会報」、「博物館ホームページ・友の会案内」などをご覧ください。

友の会会長 藤野正治



Pick up!

常設展示室アンケートから 展示解説

毎週火・木・金曜日、常設展示室ではボランティアによる展示解説を行っています。案内役は明治大学博物館友の会のボランティアが務め、来館者の皆さんと対話をしながら館内を巡ります。今回はアンケートに寄せられた感想をいくつかご紹介しましょう。

説明が分かりやすくてすごく勉強になった 縄文のつけ方や石器で紙を切る体験をさせてくれてよかった 説明を聞いて、学校では教わらなかった事を知ることができた 丁寧に説明してくれたので、ギロチンなどの道具の使い方がわかった 英語ガイドを充実してほしい 係の人が最後まで付き添っているいろんなことを説明してくれたのでためになった 見どころ資料や各部門の特徴、当館の成り立ちまで分かる展示解説は、初めて来館されたという方に特におすすめです。どうぞお気軽に声をおかけ下さい。

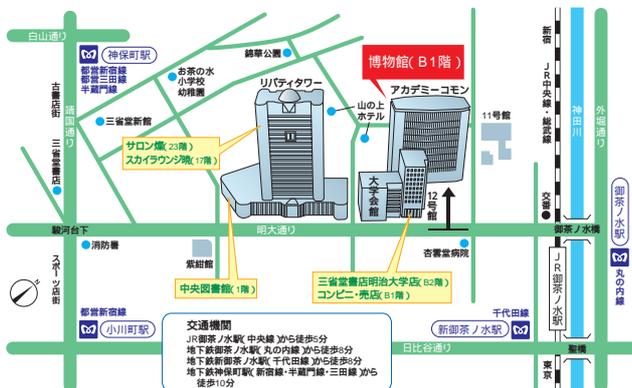
博物館案内

【博物館案内】

開館時間 10:00~16:30 (入館16:00まで)
休館日 夏期休業日(8/10~8/16)
冬期休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
開館時間・休館日には変更場合があります。
観覧料 常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

開室時間 月~土 10:00~16:30
閉室日 日曜・祝日・大学が定める休日
図書室はどなたでもご利用いただけます。
蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記：今号は友の会20周年とミュージアム・アイズ50号という節目の号となりました。いずれも初期の姿を振り返ると、随分と変化することがよくわかります。また、博物館自体も大きく変わりました。次の30周年、100号では一体どのような姿になっているのでしょうか。その時までぜひ今号を大事にとっておき、また改めて見比べることで時間の流れを実感していただければ幸いです。(け)